

テーマ：“キリストの十分性”を惑わせる偽りの教えはどんなものだったか？

○十分性を脅かす偽りの教え：三つの危険な教え

1. _____(16-17)

「律法主義とは、人の達成による宗教です。霊性はキリストに人の行いを加えたものに基づく主張します。人が作り出した規則に従うことが、霊性を測る尺度となるのです。」(ジョン・マッカーサー)

1) 食事に関して

※レビ記 11:1-2

「それから、主はモーセとアロンに告げて仰せられた。「イスラエル人に告げて言え。地上のすべての動物のうちで、あなたがたが食べてもよい生き物は次のとおりである。」

※レビ記 11:44-47

「わたしはあなたがたの神、主であるからだ。あなたがたは自分の身を聖別し、聖なる者となりなさい。わたしが聖であるから。地をはいかなる群生するものによっても、自分自身を汚してはならない。わたしは、あなたがたの神となるために、あなたがたをエジプトの地から導き出した主であるから。あなたがたは聖なる者となりなさい。わたしが聖であるから。」以上が動物と鳥、また水の中をうごめくすべての生き物と、地に群生するすべての生き物についてのおしえであり、それで、汚れたものときよいもの、食べてよい生き物と食べてはならない生き物とが区別される。」

「イスラエルの多くの人々は堅く立って、汚れた食物を食べないことを心に決めていた。彼らは食べ物によって汚されたり、聖なる契約を冒瀆したりするよりは、むしろ死を選んだ。以後、食物の掟を守ることは、国家と宗教に対する忠誠の基本的な印とみなされるようになった。当時、人気のあったユダヤ人の民話に見られるように、英雄やヒロインは、まさに異邦人の食物を食べることを拒否するという点で、神に認められた敬虔さの模範として描かれていたのだ。」

※マルコ 7:18-19

「イエスは言われた。「あなたがたまで、そんなにわからないのですか。外側から人に入って来る物は人を汚すことができない、ということがわからないのですか。そのような物は、人の心には、入らないで、腹に入り、そして、かわやに出されてしまうのです。」イエスは、このように、すべての食物をきよいとされた。」

※使徒 10:11-15

「見ると、天が開けており、大きな敷布のような入れ物が、四隅をつるされて地上に降りて来た。その中には、地上のあらゆる種類の四つ足の動物や、はうもの、また、空の鳥などがいた。そして、彼に、「ペテロ。さあ、ほふって食べなさい」という声が聞こえた。しかしペテロは言った。「主よ。それはできません。私はまだ一度も、きよくない物や汚れた物を食べたことはありません。」すると、再び声があつて、彼にこう言った。「神がきよめた物を、きよくないと言ってはならない。」」

※1 テモテ 4:3b-4

「…しかし食物は、信仰があり、真理を知っている人が感謝して受けるようにと、神が造られた物です。神が造られた物はみな良い物で、感謝して受けるとき、捨てるべき物は何一つありません。」

※ローマ 14:1-4

「あなたがたは信仰の弱い人を受け入れなさい。その意見をさばいてはいけません。何でも食べてよいと信じている人もいますが、弱い人は野菜よりほかには食べません。食べる人は食べない人を侮ってはいけないうし、食べない人も食べる人をさばいてはいけません。神がその人を受け入れてくださったからです。あなたはいつたいだれなので、他人のしもべをさばくのですか。しもべが立つのも倒れるのも、その主人の心次第です。このしもべは立つのです。なぜなら、主には、彼を立たせることができるからです。」

2) 祝日・祭日に関して

※民数記 28:11,14

「あなたがたは月の第一日に、主への全焼のいけにえとして若い雄牛二頭、雄羊一頭、一歳の傷のない雄の子羊七頭をささげなければならない。…これは一年を通して毎月の、新月祭の全焼のいけにえである。」

※ローマ 14:5-6

「ある日を、他の日に比べて、大事だと考える人もいますが、どの日も同じだと考える人もいます。それぞれ自分の心の中で確信を持ちなさい。日を守る人は、主のために守っています。食べる人は、主のために食べています。なぜなら、神に感謝しているからです。食べない人も、主のために食べないのであって、神に感謝しているのです。」

※ヘブル 10:1

「律法には、後に来る素晴らしいものの影はあっても、その実物はないのですから、律法は、年ごとに絶えずささげられる同じいけにえによって神に近づいて来る人々を、完全にすることができないのです。」

※ヨハネ 6:35

「イエスは言われた。「わたしがいのちのパンです。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことはありません。」

※1 コリント 5:7

「…私たちの過越の小羊キリストが、すでにほふられたからです。」